挑戦

３年　熊谷

僕は今まで何かに挑戦するというときに，「面倒くさい」「どうせ挑戦しても無駄なだけ」と思い，逃げてきました。でもそんな僕に，「それでいいのか」「そんな人間になるな」と心の底から教えてくれたのが，主人公「鳴海一哉」でした。

一哉の家は教会で，学校では，オルガン部員の高校３年生です。一哉の父は牧師をし，母はピアニストでした。しかし，その二人は，一哉が10歳のとき，母親の不倫が原因で離婚してしまいます。一哉はそれから女嫌いになり，性格もひねくれてしまうのです。そんな一哉が，オルガン部の仲間をはじめ，いろいろな人たちに出会って生活していくうちに，少しずつ過去と向き合い，成長していくのです。

僕には，何にでも相談にのってくれる両親がいて，温かい家庭の中で育ってきました。実際に一哉のような境遇を理解するのは，難しいのかもしれません。きっと一哉はさびしかったのでしょう。一番甘えたいときに両親に甘えられず，自分を抑えながら育ってきました。そんな一哉を思うと，今まで気付かなかった自分の幸せが，身にしみてきます。一哉は両親に振り向いてほしかったのだと思います。それができない現状の中で育った一哉は，知らず知らずのうちに，かたくなな一哉をつくっていったのかもしれません。

一哉は，父と祖母が見に来るオルガン部の発表会があるにもかかわらず，友達の誘いにのって学校を抜け出したことがありました。誘いを断って，発表会に出場するのが，一哉の責任だと思いますが，周りのことを考えられずにいる一哉にとって，責任という言葉は，頭の中にはなかったのでしょう。そのとき調度，ロックに魅了され，オルガン部であることさえも忘れかけているのでした。

そんな一哉でしたが，以前，母親にピアノで弾いてもらった曲に衝撃を受け，今までとは違う何かを感じていました。いつも自分には「何かかけているものがある」と思っていた一哉。

僕にも一哉と同じような面がありました。野球部の部長をしていた僕ですが，「やめたい」と思ったことが何度かあります。あこがれだった部長に選ばれ「みんなを引っ張っていくんだ」と張り切っていました。しかし実際やってみると，全くうまくいきません。口では強いことを言っても，人前に立つと何も言えなくなってしまう自分がいたのです。練習中，部員がふざけていてもうまく注意する

ことができず，しだいに，部員たちは，僕が何を言っても聞く耳をもたなくなってしまいました。「僕が目指しているチームはこんなんじゃない」と思っても，このチームを変えることもできない。自分の無力さを感じ，逃げだすことしか考えられなくなっていました。そして，今年，僕はその思いを抱いたまま引退しました。部長の仕事が終わったとき，不思議な気持ちだったのを今でも覚えています。「やっと終わった」という気持ちと「あのときああしていれば」という後悔の気持ち。今となっては後悔の気持ちの方が強いかもしれません。

一哉は，自分に欠けているものが何なのか，オルガン部のクリスマスコンサートで気付くことができました。はじめ，かっこをつけるために，母親から弾いてもらった「メシアン」の曲を選んだ一哉。しかし，練習をしていくうちに次第に気持ちが変化していくのです。それから，少しずつ一哉は変わっていきました。自分に欠けているもの，そう，いつも本気になっていない自分に気付くことができたから。もしかしたら，その曲には，家族が仲良くしていた頃の魔力が備わっていたのか……。

僕もあのとき，あきらめずに挑戦する気持ちをもてばよかった。そうすれば，今，こんな気持ちではないはずなのに。一哉をみていると，自分の弱さをまざまざと見せつけられたような気がしてなりません。もう，後悔はしたくありません。面倒がる自分も捨てたいです。できるかどうかわかりませんが，あきらめる前にやろうとする気持ちをもちたいです。

僕は今年受験生。いつもなら，受験のプレッシャーにおしつぶされてしまう自分かもしれません。しかし，今は違います。逃げて後悔だけは絶対にしたくありません。やるだけのことはやりたいと思っています。そして，大好きな野球も続けたいです。今度は遠慮ではなく，いい方向へ野球部が進むよう，声を出していきたいです。そして，将来，地域の人たちのために働く職業に就きたいと思っています。

一哉は将来何になっているのでしょう。牧師？それともピアニスト？過去の自分と向き合うことができた一哉。もう迷わないでほしです。自分が思うまま突き進んでほしいです。

僕ももう迷いません。後悔しないために。